

梅花短大 家本 修 滋賀女短大 ○成田巳代子

大谷女短大 小林昭子 樟蔭東女短大 山本倫子 鳴門教大 広瀬月江

目的 幼児の発達段階における母親の影響は、母子関係として心理学的課題の一つである。被服の嗜好性の構成においてその過程を明らかにすることは、重要な課題と考えられる。そこで本研究は、母子間における被服の嗜好性に着目しその関係と法則性を求める。本報では、まず母親における被服色彩の嗜好性やパーソナリティ等の関係を検討した。

方法 幼稚園児（3歳～6歳）とその母親を対象に図形や色彩の嗜好性についての調査を実施した。調査対象数は、115組で幼児と母親に同一ナンバーの調査用紙を用いて、幼児には面接調査を母親に配票留置法により行った。実施数は、115組で回収率は100%である。調査地域は、東大阪市内、滋賀県下、徳島県下の各幼稚園である。調査時期は、昭和61年11月～12月上旬。実施場所は、各幼稚園の教室である。母親への調査用紙には、日色研のカラーチャート片を貼り付けたサンプル票を添付してある。また、サンプル票を見る場合の注意事項書き添え、読了してから回答してもらった。母親の主たる調査項目は、基本属性（年齢、職業等、家族構成、居住地域、他）、色関係の項目（好きな色、嫌いな色、似合う色、着たい服の色、子供に着せたい服の色、他）などから構成した。

結果と考察 ①：他の年代に比べ30代前半では、黒の嗜好が高い。（29.4%）②：似合う服の色と好きな服の色とは、50%以上で一致する。③：赤と黒が好きな母親の比較では、黒の好きな母親の方が気が長い。④：赤と白が好きな母親の比較では、義理的な関係では赤が消極的である。⑤：ピンクと白が好きな母親の比較では、卒業式の服の相談をピンクの方が友人に良く相談している。性格的な傾向と色の嗜好性の関係が存在する。